

ポーラ・ホーキンスの書きたかったこと ——*The Girl on the Train* から *Into the Water* へ——

横山 孝一*

(2019年1月7日受理)

はじめに——*The Girl on the Train*の衝撃

「心理サスペンス」作家ポーラ・ホーキンス (Paula Hawkins) の登場は、無名だったイギリス人女性が小説によって世界中で注目されるようになったという意味で、『ハリー・ポッター』シリーズの J・K・ローリングを髣髴させる。2015 年に全米デビューした *The Girl on the Train* (『ガール・オン・ザ・トレイン』) のすばらしさは、インターネットで語りぐさとなり、英語で書かれた原書のペーパーバックはわが国の丸善でも平積みになっている。

あらすじはこうだ。毎朝、ロンドンへ電車で通勤するバツイチ女性レイチェル 33 歳は、別れた夫トムに未練があり、子供ができなかったことに劣等感を抱いてアルコール依存症に陥っている。唯一の楽しみとして、信号で止まるとき車窓から見える家のカップルに、叶わなかった理想の夫婦像を投影する。(四軒先には5年過ごしたトムとの家があり、今トムは、再婚したアナと赤ん坊のイーヴィと暮らしている。) ところがある日、幸せであると思い込んでいた理想の女性が夫とは別の男とキスしているところを目撃してショックを受ける。しかも、メガンというその 29 歳の女性が失踪し、無残な死体となって発見される。実はレイチェルは、会社を首になっていて、部屋を貸してくれている友人の手前、毎日会社に行っているふりをして、幸せそうに暮らすトムとアナ夫妻にストーカー行為を繰り返していたのだった。7月13日土曜日の晩にメガンはいなくなったが、翌朝目を覚ましたレイチェルは、頭に負傷し、晩の記憶を丸ごと失っていた。記憶は徐々に戻り、完全に思い出したとき、衝撃の事実を知ることになる。

この物語はホラー小説の巨匠スティーヴン・キングも「アル中の語り手」に魅了されて夜通し頁をめくったという (King)。2013 年 7 月 5 日現在から、一人称でレイチェル、メガン、アナの三人が自分の日常を語る。レイチェルの目には幸せそうに見えたメガンにもつらい過去があり、その秘密が明らかになっていくのも読みどころ

だ。レイチェルが犯人と見なした一緒にいた男カマルの正体がわかってくるのも楽しい。また、赤ん坊をレイチェルにさらわれそうになったアナの不安感や、トムとの不義の出会いをアナ本人の口から聞けるのも興味深い。むしろ主人公はレイチェルだ。空白の記憶をめぐる、通勤電車のごとく行きつ戻りつするうちに徐々に、驚愕の出来事が明らかになってくる。アルコール中毒で被害妄想の気もあるレイチェルの記憶は、当然ながら主観的で曖昧で欠落もあって信用できない。レイチェルの的外れな想像と推理によって、読者は、意外と単純な真相になかなかたどり着くことができず、真相を知って初めて、ポーラ・ホーキンスが採用した「信頼できない語り手」の手法のうまさを感じるのである。

この本は 2015 年『サンデー・タイムズ』で新記録の 20 週連続ベストセラー・リスト第 1 位となり、全世界で 2,000 万部以上が売れている。ハリウッドのドリームワークスが、エミリー・ブランツ主演で映画化した。映画版がヒットしなかったのは、上記で述べた小説技法が映像に勝るからで、ポーラ・ホーキンスの本のおもしろさを改めて実感させる結果となった。わが国でも池田真紀子訳『ガール・オン・ザ・トレイン』として講談社文庫から 2015 年 10 月に出版され、表紙に追加された宣伝用の帯には、「空前のベストセラー、早くも映画化! 11 月 18 日全国ロードショー 世界 50 カ国で出版、累計 1500 万部」と記されていた。今どきこれほど売れる小説が現われるのは珍しいことだ。出版界の熱気が感じとれよう。

それから 2 年が過ぎ、2017 年、ポーラ・ホーキンス待望の第 2 作が発表された。*Into the Water* である。わが国でも、シドニー・シェルダンの「超訳」で有名なアカデミー出版が、社長の天馬龍行訳で『魔女の水浴』という奇抜な邦題で同年 12 月に発売している。東京都内では、前作を意識してか「通勤電車」に翻訳出版を予告する広告を出す力の入れようだった。原書は注目作としてよく売れている。大判のペーパーバックは出版されてすぐ都内の洋書売り場から消え、今 (2018 年 8 月現

在)は、普通サイズになって *The Girl on the Train* と共に平積みになっている。ホーキンスのファンなら買わずにはいられまい。しかし、伝説と化した第1作と比べると評価は芳しくなく、インターネットをにぎわしているレビューで前作を凌ぐと書いている者は皆無に近い。

わが国の『魔女の水浴』のほうは、アマゾンのカスタマーレビューを見る限り、あまり売れていないようだ。原文と比べてみればすぐわかることだが、誤訳や省略が多く、登場人物の名前の表記に不自然なところが目立ち、警察の階級もなぜか改変されている。重要な役割を果たすパトリックが「元警視長」で息子が「警視」なのは、アカデミー出版自慢の「超訳」なのだろうか。ヘレンが校長(headteacher)から「教頭」に変わっているのは単なる誤訳に思えるが。2018年1月10日に「読むに値しない」と書き込みをしている読者は、電車の中吊り広告を見て買ってしまったそうで「翻訳も良くありません。意味がわからないところも多いし、笑ってしまったのは、ブレスレットがペンダントに入れ替わっちゃったところ。お粗末すぎです。これってちゃんと校閲してるんですかね？」(あいあい)と手厳しい。世界待望の書として出版を急いだのだろう。この読者が指摘するとおり、下巻130頁でLena(訳書ではレーナになっている)の目に留まった死んだ母のブレスレットが2行後には「ネックレス」に替わっている。おそらく、同じ川で死んでいる、リーナの親友ケイティのネックレスと混同したのだろう。サスペンス小説としては重要な小道具なので絶対に間違っってはならない所だ。筆者としては、冒頭に据えられた、Nel(訳書ではダニエラ)のタイプ原稿(訳者は上巻56頁以降は点線の枠で囲って本文と区別している)に、余計な説明をつけ加え本編自体のプロローグに改変してしまっているところに仰天した。リーナの母Danielleが町の人々の間では愛称のネルと呼ばれているのに「ダニエラ」に統一して、章題となっている視点人物の名前のあとに内容を示す副題を追加しているのは、「超訳」を発明した者としてのお客様サービスなのだろう。しかし、先ほどのカスタマーは「はっきり言って、つまらないです。誰にも感情移入できないし、登場人物それぞれの短い章が続き、あわただしいです」と酷評している。これは、超訳者・天馬氏のせいではない。「32頁までに、数えたら視点人物(POVs)が7人も入れ替わっている。混乱する!(中略)おもしろいと期待したのに、結局、退屈した」(Book of Secrets 拙訳)と原書の読者も英語のブックレビューに遠慮なく不満を書き込んでいるのだ。

Into the Water とはどんな小説なのか。本当につまらないのか。超訳『魔女の水浴』は読む価値がないのか。本論で検討してみたい。

1. 推理小説が嫌いなポーラ・ホーキンス

出版不況ながら、評判の洋書の日本語版をすぐ出せるわが国の翻訳業界は、まだまだ捨てたものではない。しかし、世界的ブームにしては、わが国におけるポーラ・ホーキンスの知名度はいまひとつだ。翻訳書を読んだ人でも、作品の背景と意義がよくわからず、彼女のことが印象に残らないのではないかと。というのも、翻訳の契約条件なのだろうか、『*ガール・オン・ザ・トレイン*』と『*魔女の水浴*』には共に、「解説」も「訳者あとがき」もついていないのだ。アカデミー出版のほうは「英国発、ご近所ミステリー 止まらない面白さ! N.Y.タイムズベストリスト No.1」と広告帯をつけて、著者の写真と簡単な経歴を載せているが、読者には不十分だろう。

ポーラ・ホーキンスは、1972年、アフリカ南部にあるジンバブエで生まれ育った。父親は経済学の大学教授。ロンドンに渡ったのは17歳の時で、オックスフォード大学で政治経済を学び、タイムズの経済記者になる。『*魔女の水浴*』の表紙裏には *The Girl on the Train* が「処女作」と書かれているが、女性向けに投資を指南する『*お金の女神*』(*The Money Goddess*)を書き、小説も、エイミー・シルバー(Amy Silver)の筆名でエージェントに勧められるまま、自分の性格に合わないロマンチック小説を書いていた。軽い小説でも、登場人物の深刻な死を描き、喜劇より悲劇が向いていることを知ったという。そして、金銭的にも行き詰まって、自分が読みたい売れる本を書こうと腰を据えて完成したものが、アル中女が主人公の大ヒット小説になったというわけだ。「『*ガール・オン・ザ・トレイン*』は、小説家としての私の最後の賭けでした」(‘The Girl on the Train’ was a last roll of the dice for me as a fiction writer.)と述べている(以上、Alter 参照)。

ここで注目したいのが、ポーラ・ホーキンスは初めてのベストセラーによって「心理サスペンススリラー」の作家として知られるようになったが、それは、偶然そのような小説を書いただけで、自分では推理作家とは思っていないということだ。おもしろいエピソードがある。ロンドン市内を歩く成功後のインタビューで、たまたまベイカー・ストリートのシャーロック・ホームズ博物館の前を通りかかったとき、ポーラ・ホーキンスはむっとして「すみませんが、これは予定外です」(Sorry, this wasn't planned.)と観光客の列を尻目に素通りしたという(Alter)。ファンの期待に反して、イギリスが誇る世界的に有名な名探偵とのツーショットは、彼女の関心の外だったのだ。いやそれどころか、推理作家と見られることをひどく嫌っているふしさえある。ちなみに、出版権を得たアメリカの有名出版社リバーヘッドの編集

長サラ・マクグラスが「普段私は、スリラーを読んだり買ったりしませんが、ホーキンスさんの小説は例外でした」(Alter)と語っているのも意味深長だ。便宜上スリラーに分類されているが、ポーラ・ホーキンスの作品はジャンルを超えたすぐれた小説と言えるのではないか。

2. *The Girl on the Train* と女性読者

問題の日に居合わせた赤毛の男から話を聞いて、レイチェルは、失われていた記憶を取り戻す。トムは、再婚したアナと一緒にいたのではなく、ベビーシッターとして知っていたメガン連れていた。かつてレイチェルをだましてアナとつき合っていたように、アナを裏切って愛人にしていたのだ。レイチェルは、駅のそばの地下道でトムに殴られこの記憶をなくした。メガンは、17歳のとき、同棲相手との赤ん坊を入浴中に寝て溺死させてしまったことがトラウマになり、夫スコットにも話せず、精神科医カマルのセラピーを受けていた。レイチェルが電車の窓から目撃した光景は、電話で駆けつけたカマル医師がメガンを勇気づけるためにしたキスだった。彼がメガンを殺したと思い込んだレイチェルは、警察ばかりか、世間からメガン殺しの犯人と疑われる夫のスコットの家にも押しかけて、カマルが怪しいと訴える。周囲に迷惑をかけるこの的外れな言動こそ、作者ホーキンスの成功に寄与した「信頼できない語り手」の手法だ。読者はレイチェルに振り回され、彼女と共に間違えながら、事件の真相にたどり着く。トムは、メガンの妊娠を知り、彼女を殺して森に埋めたが、降りつづく雨のため死体は発見されたのである。

レイチェルを中心とする三人の女性による語りの構成がみごとで、本は大いに売れたが、こうして真相をまとめてみると、ありきたりの不倫殺人でその陳腐さに驚く。筆者の私見では、真相を明かすことが作者のいちばん書きたかったことではない。ポーラ・ホーキンスの本領が発揮されるのは、その後だ。真相を知ったレイチェルは、トムの自宅で殴り倒され、囚われの身となる。トムは赤ん坊のイーヴィの面倒を見て、殺人犯と知ったアナをなだめて味方につけようとする。レイチェルは電車が通る外へ逃げ出し、ケータイで警察に通報しようとするが、トムにまた捕まってしまう。取っ組み合いとなり、レイチェルは持ってきたコルクスクリューでトムの首を刺す。警察が来ると、トムは死んでいた。正当防衛だったと、意外にもアナが証言し、レイチェルはあっさり自由の身となる。この小説でもっとも衝撃的なオチを池田真紀子訳と原文で見てみよう。レイチェルの一撃を受けるとき、トムはまだ生きていた。

あの日、電車が通り過ぎたあと、背後で物音がして、アナが家から出てきた。まっすぐこちらに歩いてくると、トムの傍らの地面に膝をつき、彼の喉に両手を当てた。

彼の顔には、驚いたような、感情を害したような表情が張りついたままだった。私はアナに言いかけた。「無駄よ、もう手遅れだから」。でもそこで気づいた。アナは出血を止めようとしているのではなかった。そうではなく、念を入れていた。コルク抜きをひねって、彼の喉にさらに深く、もっと深く押しこんでいた。そのあいだ、ささやくような小さな声で彼に何か話しかけていた。何を言っているのかは聞き取れなかった。(『ガール・オン・ザ・トレイン』下285頁、以下この本の訳文は、池田真紀子訳)

The train had passed. I heard a noise behind me and saw Anna coming out of the house. She walked quickly towards us and, reaching his side, she fell to her knees and put her hands on his throat.

He had this look on his face of shock, of hurt. I wanted to say to her, *It's no good, you won't be able to help him now*, but then I realized she wasn't trying to stop the bleeding. She was making sure. Twisting the corkscrew in, farther and farther, ripping into his throat, and all the time she was talking to him softly, softly. I couldn't hear what she was saying. (*The Girl on the Train*, 474)

愛する夫を早く楽にしてやったのか。あるいは愛想が尽きてとどめを刺したのか。アナ自身に語らせることもできたのに、作者のホーキンスはレイチェルに語らせて、アナの心情を読者の想像に委ねて余韻を残している。

「メガンは充分すぎるほどの罰を受けた」(下281頁)とレイチェルはメガンの子殺しを許して、メガンの遺灰が娘リビーの隣りに埋葬されるのを喜ぶ一方、自分たちが殺したトムは「嘘の一生だった」と責めている。わが国のカスタマーレビューを見ると、男女の読後感がまるで違うことに驚く。「ヒロインの日常がくどくど描かれ、ありふれたサスペンスがよけいに退屈に思えた。エンディングのハリウッド的オチも飽きたな」(イッパー)は男の反応だ。物語の筋を追うだけの粗い読み方ではこう思うしかない。対して女性読者は、同性が書いた女性登場人物に感情移入している。「登場人物の自虐さやダメさと、恐ろしさや、不幸のスパイラルは、他人事に思えず、恐怖に引き込まれてしまいました。近年の女

性が抱えがちな悩みが網羅されていると思いました。そして最後は強さも、陰鬱な描写で読んでいる間は面白かったのですが、最後はすかつとしたのは、私が女性だからかな?」(Amazon カスタマー)。その通りである。これが女の典型的読みだ。『魔女の水浴』について誰にも感情移入できずつまらなかったと書いた辛辣なレビューが思い出される。あれは男性読者が書いたのではないか。ポーラ・ホーキンスは女性のために書いている小説家と思われるのだ。

私たちは互いに結ばれている。事情聴取に応じてした釈明によって、永遠に結ばれている。私は自分の身を守るために彼の首を刺すしかなかった。アナは彼を救おうと全力を尽くした。(下 285 頁)

We are tied together, forever bound by the stories we told: that I had no choice but to stab him in the neck; that Anna tried her best to save him. (*The Girl on the Train*, 474-475)

トムの嘘を断罪しながら、この二人の女性の露骨な嘘に「すかつとした」のは、女性読者ならではの反応だ。そして当のポーラ・ホーキンスも、女性読者がそのような読後感を持つことを期待して書いている。こう考えると、失敗作と見なされている最新作 *Into the Water* (『魔女の水浴』) の執筆意図と読みどころがはっきりと見えてくる。

3. *Into the Water* / 『魔女の水浴』

3-1) “into the water” の繰り返しと文学的効果

アカデミー出版から出た翻訳書の邦題自体は魅力的で、この題名につられて購入する人もいるにちがいない。が、そういう人は連想した内容とまるで違うことにがっかりするだろう。確かに「魔女」は冒頭に登場するが、死んだネルが残した生原稿の一部に過ぎず、しかも本物の魔女ではなく、妻子ある男と愛人関係になって村の男たちにリンチされたことが書かれているだけだ。*The Girl on the Train* とのつながり而言えば、「魔女」として殺された若い未婚女性の名前が Libby であることは注目に値する。池田真紀子氏は「リビー」と普通に訳しているのに、天馬龍行氏はなぜか「リッピー」としたため、日本語訳の読者には同名だと気づきにくい。メガンの不注意で浴槽で「溺死した」赤ん坊と同じリビー (Libby) なのである。「わたしの腕とバスタブの縁のあいだには

さまれて、顔は水中に沈んでいた」(下 21 頁 her body wedged between my arm and the edge of the tub, her face in the water. 252 以下、下線は筆者)。「水の中」と女性の死の結びつきはポーラ・ホーキンスのこだわりなのか、メガンの死も次作への橋渡しになっている。「コーリー・ウッドの奥の草地にあふれた水の中から若い女性の遺体が発見された」(上 296 頁 筆者が池田訳の「奥」を原文どおり「中」に改めた。the body of a young woman has been found submerged in flood-water in a field at the bottom of Corly Wood, 238)。

Into the Water の本文 1 頁目 (*Into the Water*, 1 以下、原書の引用頁のみを記す) で、薄幸のリビーがまたも溺死させられるのは、一見まったく違う小説に見えるホーキンスの新作が、*The Girl on the Train* の紛れもない発展形であることを示している。“This time, they carry her into the water.”(1)「今回、男たちは彼女を水の中へ運んだ」(以下、すべて拙訳)。魔女として殺されるリビーは序の口に過ぎない。今度は、多くの女性が川の「水の中」で死ぬ。作者は、読者を小説中に引き込むかのように、*Into the Water* という書名を本文中に意識的に書き込んでいる。

この小説は 10 人以上の視点登場人物によって一人称または三人称で語られるので、読者自身が主人公を選ぶことも可能だが、間違いなく主人公の一人と数えられるのは、子供時代に住んだ家に帰ってくるジュールズだ。彼女による 1 回目の語りにも、書名“Into the Water”が重要な意味を持たせて繰り返されている。ここで言う“water” (水) とは、物語の中心舞台となる“river” (川) のことだ。

私が 4 歳か 5 歳の頃、パパは大喜びではしゃぎながら私を水の中へ連れて行った。姉さん、あなたはだんだん高い岩に上がっては、そこから川の中へ飛び込んでいたわね。

Dad carrying me, squealing and squirming with delight into the water when I was four or five years old; you jumping from the rocks into the river, climbing higher and higher each time. (11)

これがジュールズの川との出会いだ。楽しい幼年時代の回想だが、物語の伏線にもなっている。姉のネルはついには崖のてっぺんまで上がって、水の中へ飛び込んで死ぬことになった。残されたネルの一人娘リーナの世話をするために、ジュールズは仕方なく帰ってきたのである。

ずっと帰りたくなかった家の中を歩く場面に、次のような一節がある。

3-2) Into the Waterのあらすじ

突然、目に入ったものに、私はぎよっとなった。巨大な窓のすぐそばに川があった。川の上というより、川の中にいるようだった。もし窓を開けたら、下にある木のベンチにどっと水が押し寄せきて、そのまま部屋を沈めてしまうのではないか。

I came across it so suddenly it threw me, beside the enormous windows giving out onto the river—into the river, almost, as though if you opened them, water would pour in over the wide wooden window seat running along beneath. (14)

ジュールズにとって川は恐怖の対象になっている。なぜこの家を去ってずっと避けていたのか、なぜ「水の中」が怖いのか。姉の水死とは別に、彼女自身の過去の体験が関わっている。姉の仕事場に貼られた「溺死プール」の写真を見るジュールズの語りの締め括りにも、題名が現われる。

まるでその場にいる感じがした。崖のてっぺんに立って、水の中を覗き込んでいるのだ。私は、恐ろしいスリルと忘却の誘惑を感じていた。

I felt as though I were *there*, in that place, as though I were standing at the top of the cliff, looking down into the water, feeling that terrible thrill, the temptation of oblivion. (15)

このように見ていくと、やはり、*Into the Water* は『水の中へ』もしくは『川の中へ』と訳すべきだった。著者のポーラ・ホーキンスは思い入れたっぷりに、読者の関心を問題の「水の中へ」引き込もうと、本文中で効果的に題名を繰り返しているのだ。これは、多くの登場人物による悪評高い視点の転換、前作でも使った記憶の変容などと同様、文学的技法である。ホーキンスは原書の冒頭に、「記憶は固定されているものではなく思い出すたびに変容するものだ」というオリバー・サックスの *Hallucinations* (思い違い、錯覚) の一節を掲げている。シドニー・シェルダンなどの娯楽作が専門のアカデミー出版にとって、こんな文学的エピグラフは邪魔なだけだ。『魔女の水浴』では、超訳の一環としてあっさり省いている。娯楽を第一に求める多くの一般読者の便宜を図ったのだろうが、文学作品として見た場合、作者の工夫やこだわりをあまりにも無神経に破壊しているように思われる。

普通のスリラー小説よりも文学的だということがわかってきたところで、あらすじを紹介したい。しかしまず知っておくべきことは、その書き方である。10人以上の登場人物が一人称または三人称で物語の視点となる。短いときは1頁、長くても10頁前後、たいていは2、3頁で各章が終わる。英語を学ぶために原書のペーパーバックを読みたい者には、理想的な長さだろう。翻訳本で読む一般読者は、休日一気に読むつもりの人が多いだろうが、この小説は何日もかけてゆっくり読むべきだ。気短な人に先に注意しておく、ガイドなしでは1回で理解することは相当難しい。結末を知ったうえで読み返すことが必要である。2回目ようやく、そうだったのかと納得できることが多い。ジグソーパズルのように各人物の物語(思い込みや錯覚や誤解以外に、意図的な嘘も多数混じっている)を組み合わせて全体像を作り上げるのだ。たいていのスリラー小説は読み返すことはまずないが、*Into the Water* は再読を楽しむ小説なのだ。それを面倒と思う人は、読まない方がいい。あるいは、以下のわかりやすく再構成したあらすじを参考に、自分の目で本編を確かめていただきたい。

2015年、イギリスの閉鎖的な田舎町ベックフォード。その町を貫く川には、水泳プール(a swimming pool)ならぬ「溺死プール」(The Drowning Pool)と呼ばれる、自殺もしくは殺人の名所がある。魔女狩りの時代から、問題を抱える多くの女性が死んでいるのだ。ネル・アボットは作家として野心を抱き、嫌がる町の人々を取材して、それぞれの女性が川で死ぬまでの経緯を本にまとめようとしていたが、完成前に溺死プールの崖から落ちて死んでいるのが発見された。

ネルと不和になっていた妹のジュールズは、少女時代のトラウマから、ずっとこの町を避けていたが、母子家庭のネルが残した15歳の娘リーナの面倒を見るため、かつて過ごした川辺の家に戻ってくる。ジュールズは母が癌で孤独な少女期を送り、13歳のとき過食症で太り、美人の姉ネルにコンプレックスを抱いていた。ある夜、姉の寝室を覗いて劣等感が増し、キッチンでカクテルを作って飲んでいるところを、泊まりに来ていたネルの恋人でプレイボーイのロビー(ロバート・キャノン)に見つかり、犯されてしまう。川で自殺しようとして姉に助けられるが、ロビーと共犯と思い込んで、ネルが死ぬまで恨みつづけ、電話で話すのも拒絶していた。リーナが行方不明になり、実の父親らしいロビーをやっと訪問。トラウマの元となったセクハラ行為を責める。ネルが何も知らなかったと聞き、ジュールズは、死んだ姉とよう

やく和解し、リーナを代わりに育てる決心をする。

ネルの謎の死の数か月前には、リーナの親友ケイティが川で自殺していた。ケイティは、リーナと一緒に男性教師を誘惑して赤面させるゲームを始めて、ハンサムなマーク・ヘンダーソン(29歳)に本気で恋してしまった。ヘンダーソンは16歳になっていない教え子との関係がイギリスでは「犯罪」になり、刑務所に入れられて四人たちの慰み者になることを怖れた。ケイティは自分たちの関係がずっと知られないように、リーナに秘密を守るよう頼み、甘美な自殺を遂げたのだった。

リーナは約束を守って、ケイティの死後、マーク・ヘンダーソンのことは黙っていた。だが、愛する親友を失ったことを恨み、ケイティの弟ジョッシュと、ヘンダーソンの借家の窓ガラスに石を投げつける。ジョッシュが口を割ったと聞き、リーナはショーン・タウンゼンド警部補に秘密を明かす。そして夜、ヘンダーソン宅に侵入し、帰ってきたところを襲撃するが、押さえ込まれてしまう。ヘンダーソンは、元恋人の海辺の別荘へリーナを車で連れ去る。そこで、ヘレン・タウンゼンドの校長室から何気なく持ち出したブレスレットがリーナの目に留まり、母が身に着けていたものを持っているヘンダーソンを殺人犯かと怪しむ。彼は潔白を訴えてなだめようとするが、リーナは、ケイティのことを思い出し、またも逆上する。

その後、リーナは自力で脱出して保護され、心配するジュールズの元へ帰る。以後、マーク・ヘンダーソンは行方不明となり、学校ではリーナが殺したと噂される。ネルの事件を捜査していた地元警察のショーン・タウンゼンド警部補の父親で元警官のパトリックの家に、上司ショーンとネルの関係を疑うエリン・モーガン巡査部長と、ブレスレットのことを知ったジュールズが押しかけ、息子の嫁のヘレンが間に入ってかばおうとするが、パトリックは、ブレスレットをもぎとって崖からネルを突き落とすと告白して、逮捕される。家父長を自認する老人は、息子を誘惑して、川で母親を亡くしたショーンのつらい過去を聞き出そうとするネルが許せなかったと言う。パトリックは妻のローレン殺しも認め、6歳だったショーンは何も知らないと言断言して、刑務所に入る。

ローレン殺しの真相をショーンは悪夢として記憶していた。父パトリックは、母ローレンの不貞を疑って家で殴り、瀕死の彼女を川に捨ててに行った。幼いショーンは知らずに車の後部座席に乗り込み、死の淵にある助手席の母を見て、父親の犯罪に立ち会うことになってしまった。パトリックは罪を隠して息子を育てあげ、ショーンはトラウマを抱えつつも、警察の仕事にまじめに打ち込んでいた。そこにネルが現われたのだ。ローレンの死の真相を知ろうと、ネルはショーンの愛人になった。二

人の関係を知ったパトリックは、息子を殴りつけたが、実際のところ、ネルは殺さなかった。

ショーンはネルと酒を飲んで一緒に過ごしたあと、溺死プールの絶壁に上った。当時の状況を知りたいネルに対して、うわの空の彼は、車の中で見た助けを求める母の姿を思い出し、幻影を振り払うつもりで、崖から下を覗き込むネルを後ろから押してしまうのである。

つまり、ネルは真逆さまに水の中へ落ちて岩に激突して死ぬわけだが、下に落ちて行ったことをつけ加えた超訳と違い、オリジナルの原文では、「両手でネルの腰のくびれを押し、私は幻影を押しのかけた」(With my hands in the small of Nel's back, I pushed her away.) (386)で終わっている。以上が、多くの枝葉(他の登場人物や様々な挿話)をばっさりカットした、*Into the Water*の簡単なあらすじだ。

ネルの前にケイティが川で死んでいたことは、初めて読む人にはわかりにくく、彼女の場合は青い鳥のネックレスを身につけていたので、天馬氏が取り違えたような混乱が起こる。ネルの原稿に書かれた他の女性たち(たとえば、第一次世界大戦に出征して暴力をふるうようになった夫を殺すアン・ウォード)や、ネルにヒントを与える霊媒のニッキー・セイジ、母ローレンの死の直後、幼いショーンの面倒を見た婦警ジェニー、最愛の娘ケイティが死んだことでリーナを恨みつづけるルイーズなど、主筋と直結しない人物は、おもしろくてもとりあえず省略した。ヘレンとよりを戻してベックフォードを去るがすぐに姿を消すショーン、ロンドンのアパートで二人だけの新生活を始めるジュールズとリーナのエピローグも読者の記憶に残ると思うが、あらすじからはあえて切り離れた。

3-3) 推理小説としての *Into the Water*

リバーヘッド版で388頁ある *Into the Water* のあらすじからわかることは何だろうか。推理小説としては、二人が川で謎の死を遂げており、いったい何があったのかが興味の中心になる。ベックフォードの町の汚点である「溺死プール」を本にしようとしたネル・アボットは、当然、町の人々に嫌われており、誰に殺されたのかが、最大の謎となる。登場人物が多いことから、その中の誰が犯人なのか推理しながら読むことが期待される。犯人は意外な人物で最後の最後に明らかにされる。あらすじに書いてしまったとおり、ショーン・タウンゼンド警部補が真犯人だ。ネル・アボットの水死事件の捜査を指揮していた人物なので、まさに意外な犯人でインパクトもありそうだ。なにしろ、謎の真相をいちばん知りたがっ

ているジュールズとリーナの家いち早くやって来て、次のように検死結果を述べているのだ。

「ネルは落ちた衝撃で亡くなったのです。誰かと争った形跡はありません。血液中にアルコールも検出されました」さらに穏やかな声で言う。「判断を誤るにはじゅうぶんな量です。足元がふらついたのでしょう」

“Nel was killed by the impact. There’s no indication that anyone else was involved. There was some alcohol in her blood.” His voice grew softer still. “Enough to impair her judgement. To make her unsteady on her feet.” (82-83)

再読すると、「よく言うよ」とあきれるか、それとも、これはみごとな伏線だと感心するか、のどちらかだろう。

ショーン・タウンゼンド自身の語りにも伏線がある。霊媒師ニッキー・セイジ (Sage は「賢人」の意) が面と向かってこう言う。

「わかっているんだろう。これはこの前の事件とは違うんだ。ケイティ・ホイッテカーのときとは違う。これは、おまえさんのおっかさんの事件に似ているんだよ」

“You know, don’t you, that this wasn’t like the last one? This wasn’t like Katie Whittaker. This was like your mother.” (118)

もちろん真犯人の警部補は「それはどういう意味だ？何か知ってるなら、教えてほしい。どうなんだ。ネル・アボットの死について何か知ってるのか？」(118)と、しらを切る。アガサ・クリスティが『アクロイド殺し』(*The Murder of Roger Ackroyd*, 1926)でやった犯人が語り手というトリックだが、作者のホーキンスは読者に対してフェアに振る舞っているように見える。次の頁では大胆にも、最近母をよく思い出すと語り、「母の顔が現われる。ほほ笑んでいる時もあるが、そうでない時もある。私のほうに手を伸ばしてくることもある」“Her face comes to me; sometimes she is smiling, sometimes not. Sometimes she reaches for me.”(119)と最後のどんでん返しに直結するヒントを与えている。

目を閉じると、車の中の母が見えた。私のほうに手を伸ばしてくる。私は、母から逃れたかった。のけぞったが、なおも、私めがけて手を伸ばしつづける

ので、私は押しのけようとした。

I closed my eyes and I saw her in the car, reaching out for me, and I wanted to get away from her. I shrank back, but she kept coming at me and I tried to push her away. (386)

この直後に先に引いた最後の一文「両手でネルの腰のくびれを押し、私は幻影を押しのかた」が来るのだ。さりげない一行「私のほうに手を伸ばしてくることもある」を記憶する読者はまれだろうが、1983年のローレン・タウンゼンドの死については、このショーンの章の次(124-127)に、ネルがタイプした生原稿(取材不足で、ローレンは溺死プールまで歩き、崖から投身自殺したことになっている)を掲げており、作者による、謎解きの鍵の配置はかなり工夫されている。ネルの原稿自体が信頼できないことは、もちろん、町の人々の批判によってほのめかしてある。

作者はさらに、ショーンとネルの関係についても伏線を張っている。ショーンと別居して舅と暮らす不眠症のヘレンの章だ。

それはショーンと共に始まった。最初に彼女が疑い、それからパトリックによって、最悪の事実が確定した。昨年の秋に、自分の夫、意志の強いしっかりした不動の道德家である夫が、思っていたのとは全然違う人であることを発見してしまったのだ。

It started with Sean. First with her suspicions and then—via Patrick—the awful confirmation. Last autumn she had discovered that her husband—her solid, steadfast, resolutely moral husband—was not at all what she thought him to be. (186)

ここまで来ると、ショーンの不倫相手は誰か想像がつく読者もいよう。1983年のローレン・タウンゼンドの死に関するネルのタイプ原稿の続きは、100頁以上あとの297-300頁に「ローレン、再び」(LAUREN, AGAIN)として掲げている。幼いショーンが母親の事件直後に婦警のジェニーに語った話で、母親が虐待されていたことと、父親に口止めされていたことがほのめかされている。つづくショーンの章で、ようやく、取材に来たネルとの出会いが語られる。あとは、あらすじに書いたとおり、息子を守るパトリックの自白で一件落ち着いたように見せて、どんでん返し。最後のショーンの章で、真犯人本人の口からネル・アボットの死の真相を語らせている。

以上、誰がなぜネル・アボットを殺したのかという犯人探しのプロットは、ミステリー小説の条件を満たしているように思われるが、実際は、楽しみにしていた要素が足りないと感じた読者が多かった。「書評：ポーラ・ホーキンス著 *Into the Water*—本の犯罪」によると、犯罪小説の専門家は以下のような評価を下している。

残念ながら、*Into the Water* には、*The Girl on the Train* をいやおうなく楽しく読ませた迫力と活力が欠けている。正直言って、犯罪小説よりも純文学か女流小説を探している読者のほうが好みに合うと思う。*Into the Water* はキャラクター研究と見なすことができるが、ここでいう「キャラクター」とは、暗い過去を持つ町のことだ。これを好みとする読者もいるだろうが、私は、ミステリーとサスペンスの要素が *Into the Water* ではこの次と知ってがっかりした。この本を手に取り、心をわしづかみにするミステリーを期待した読者として、私はひどく失望した。*Into the Water* は美しく書かれているかもしれないが、物語の進行は遅く、不必要と言っていいくらい多くの視点の転換や語り手の交代があって、読むのが煩わしい。これらの要素は、純文学や女流小説では創意や実験として評価されるのだろうが、ファンを引きつける犯罪小説にはならないのである。

Unfortunately, INTO THE WATER lacks the drive and energy that made THE GIRL ON THE TRAIN so compulsively readable. Truly I think readers looking for literary fiction or women's fiction might find INTO THE WATER more up their alley than crime fiction readers will. INTO THE WATER can be considered a character study, where the "character" is a town with a dark past. This might suit some readers, but I was disappointed to discover that the mystery and suspense elements of this story take a backseat in INTO THE WATER. As a reader picking this book up and hoping for a gripping mystery, I was sorely disappointed. INTO THE WATER might be beautifully written, but it moves slowly, and drags the reader through an almost unnecessary amount of perspective-changes and narrator-swaps. These elements that might be inventive or experimental in literary fiction or women's fiction just do not translate into compelling crime writing. ("Crime by the Book")

要するに、犯罪小説として読むと、つまらないということだ。犯罪小説ファンが、*The Girl on the Train* でミステリーとサスペンスを楽しんだことがわかる。なるほど、登場人物は多くないのに、カマルもスコットも怪しく感じられ、レイチェルが衝撃的真相にたどり着くまでの物語は、失った記憶に象徴されるようなサスペンスとミステリーが濃厚だった。登場人物が多い分、*Into the Water* は犯人探しが楽しめるはずだが、書評の評者が書いているように視点や語り手が替わりすぎて、不慣れな読者は、下手をすると、何が起きているかもわからず、犯人探しどころではなくなってしまう。日本語版の『魔女の水浴』も、超訳を施したとはいえ、アカデミー出版の従来訳書よりも高度な読みと忍耐力を課す。複雑な語りについて行けない読者、単なる娯楽を期待する男性読者が、カスタマーレビューで「つまらなかった」と叫ぶことになる。引用した書評でも指摘されているように、*Into the Water* はまさに女流文学作品と呼ぶのが適切だ。シャーロック・ホームズの生みの親で娯楽小説の雄コナン・ドイルよりも、ポーラ・ホーキンスは、「信頼できない語り手」をよく採用したハーマン・メルヴィルや、「視点人物」の効果を意識的に利用したヘンリー・ジェイムズ、常に実験的で女性の意識に敏感だったヴァージニア・ウルフといった英米文学の代表的作家たちのほうが好きにちがいない。

3-4) #MeToo 運動と *Into the Water*

それでは、ポーラ・ホーキンスが文学的手法を使っ
ていちばん書きたかったこととは何だろうか。

ショーンがネルと不倫していたかもしれないと的確に推理できても、確認できるのは100頁以上先である。その間何があったかといえば、もう一つの死、ケイティの自殺をめぐる物語が語られているのである。*The Girl on the Train* で、わが子リビーを殺してしまったメガンの過去の物語を思い出そう。夫スコットに秘密にして彼女の心を蝕んでいくこのトラウマは、文学的素材であり、レイチェルの失われた記憶を追うミステリー・サスペンスとは一線を画していた。浴槽におけるリビーの死が *Into the Water* の冒頭の魔女狩りで男たちにリンチされるリビーの溺死につながっていることはすでに述べた。赤ん坊のリビーはメガンが殺したことになっているが、作者ホーキンスは、好意的に描いている精神科医のカマルにこう言わせている。

「いまの話聞くかぎり、マックという男性は責任ある行動を取っていない。まだ少女のような年齢の世間知らずな女の子と同棲したうえ、そばに寄り添

っているべきときにその少女を一人きりにしたんです。おそらく、自分にも責任はあるとわかっているでしょう。彼はその責任から逃げたんです。あなたからではなく」（『ガール・オン・ザ・トレイン』下、97頁）

“From what you have told me, he isn't a man who behaved responsibly. He took in a very young, very vulnerable girl and left her alone when she needed support. Perhaps he knows that what happened is your shared responsibility. Perhaps that's what he ran away from.” (*The Girl on the Train*, 316)

ここを押さえておけば、*The Girl on the Train* が唯の心理スリラーではなかったことがわかる。責任を取らなかったばかりか相手は無残に殺して幸せな結婚生活を続けようとした、トムに象徴される男性の横暴を告発し、女性の連帯を呼びかけたフェミニズム小説だったのだ。水に浸かったメガンの死体は、*Into the Water* に引き継がれ、女性を蔑視するパトリックに代表される家父長的な男性が告発されている。表面上、パトリックは妻を亡くしても地域社会に貢献しつづけた優秀な警察官（“a highly decorated officer” 128）としてベックフォードの町の人々から尊敬されている。ところが、この老人は、逮捕に来た巡査部長（DS = Detective Sergeant）のエリンを「汚い売女」（“dirty bitch” 351）と呼び、ジュールズには「あんたは若かったとき、肥満体だったんだろ？」（Obese, weren't you, when you were younger? 354）と聞き、「むかつくほどのデブだったんだ、この女は」（Disgusting fat thing, she was. 354）とあからさまに侮辱する。もちろん、ホーキンスが創造した強い女性たちは、黙っていない。エリンは、ショーンの不倫とネルの不審死を持ち出して対抗する。喉をつかまされると、胸を殴りさえする。ジュールズのほうは、「むかつくじじい」（Disgusting old man, 354）と言い返している。パトリックの妻ローレンに代表される、溺死プールでの女性の死は、男性の暴力によってもたらされていると言いたいのだ。

作者の絶望は深く、カマルのような女性に理解のある男性はもはや登場せず、エリンはレズビアンであり、ジュールズは男性と結婚するよりもリーナとの共同生活に希望を見出している。アメリカでは史上初めて独身女性の数が既婚女性を上回り、それがポーラ・ホーキンスの人気につながっているという指摘もある（Henley）。*Into the Water* が出版された2017年は、男性による過去のセクハラを告発する#MeToo運動が盛り上がった年

でもある。「もしあなたがこれまでにセクハラや性的暴行を受けたことがあったら、このツイートに「わたしも」と返事を書いてください。2017年、10月16日、午前5時21分」（If you've been sexually harassed or assaulted write 'me too' as a reply to this tweet. 5:21AM—Oct 16, 2017）と女優兼歌手のアリッサ・ミラノが呼びかけたことが思い出される（Milano）。彼女は、奇しくもポーラ・ホーキンスと同じ1972年生まれで、現代女性の切実な思いを共有している。

わが国でも呼応して、政治家や官僚によるひどすぎるセクハラが問題視されるようになった。ジュールズの少女時代の体験はそれがレイプと認識されにくいので、この小説の呼びかけに被害者たちは世界中で共感を示しているかもしれない。その意味で、*Into the Water* は男性ではなくフェミニストが翻訳すべきだった。女性なら「魔女」という差別的な言葉を嫌って『魔女の水浴』などという超訳の題名はつけなかつたらう。しかし、筆者は高校生のときアカデミー出版の*The Chase* で英語を楽しく学ばせていただいた者として、『魔女の水浴』でも、ポーラ・ホーキンスの訴えは堪能できると強調しておきたい。原書もそうだが、とりあえず、あらずじをきちんと押さえたうえで、ミステリーよりもケイティの物語に注目して読むと、作品の本質が楽しめるはずだ。実際、作者も、ショーンの物語より筆に勢いがある。推理する必要もなく明かされるケイティの自殺の真相とリーナの熱い思いにこそ、*The Girl on the Train* から*Into the Water* へと発展させたホーキンスの執筆目的がしっかり込められているのだ。

おわりに——作者の完全犯罪

ケイティの自殺は、リーナといたずらのつもりで始めた、男性教師を色気で赤面させるゲームがきっかけだった。マーク・ヘンダーソンはちゃんと恋人がいて女性に不自由しないハンサムな人気教師で、他の男性教員と違って、少女のからかいはまるで通じなかった。そんな彼がリーナの知らない所で、まだ15歳のケイティと愛し合うようになる。恋愛小説にもなりえる題材だ。当のケイティは小説が始まる時にはすでに亡くなっているが、その純粋で熱烈な恋愛感情は、リーナが語る回想に垣間見ることができる。ところが本書で焦点を当てるのは、教え子に手をつけてしまったマークの醜さと刑務所で格好の標的にされることを怖れる小心ぶりだ。留守宅に忍び込んだリーナは、キッチンに流した汚れた食器や調理済み食品の食べ残しが放置され悪臭を放っているのを見つける。これは恋人に自殺された精神的ダメージの

表われと考えるのが普通だろうが、リーナは、学校での清潔なしゃれたイメージが虚像で、これこそがヘンダーソン先生の本性と見なす。「病気のけだもの」(a sick animal, 267)のような汗臭い寝室で「茶色いしみ」(a brown stain, 267)を見つけて、吐き気を催す。そこへ、何も知らない衰弱しきった当の本人が帰宅する。“Good-looking.”(207)と校長のヘレンも太鼓判を押している、ハンサムなはずのヘンダーソンは、リーナには「醜く見えた」(He looked ugly, 267)。「あたしは、すぐさま奴めがけて駆けだした。醜い顔から両目を爪でえぐり出して、奴が悲鳴をあげるのを聞いてみたかった」(I just went for him. I wanted to scratch his eyes out of his ugly face, I wanted to hear him scream. 267)。リーナは、ハサミを武器にしてかかかっていくが封じられ、車のトランクに入れられて海辺の別荘へ運ばれるが、そこでもまた攻撃を仕掛ける。

ここまで読んで気づくのは、これが、ジュールズの体験のバリエーションだということだ。ネルの葬式で久しぶりに見たロビー(ロバート・キャノン)を醜いと思ったのは、歳月の流れも関係しているだろうが、リーナと同じく心理的な要因が大きい。仕事場に訪ねて再会する場面では、「振り返ると、そこに彼がいた。葬式の日よりもさらに醜く見えた」(I turned around, and there he was, uglier even than he had looked on the day of the funeral. 252)が、先ほど一部引用した「そしてそのあとドアがバツと開いて、そこに彼がいた。彼は醜く見えた。顔と目が赤く、口を開けていた」(And then the door swung open and there he was. He looked ugly, his face and eyes red, his mouth open. 267)ときれいに対応する。

ロバート・キャノンはベックフォードの女の子の半分を物にできたと豪語する(254)が、これはマーク・ヘンダーソンが「ぼくは、女を手に入れるのに苦労したことは一度もない。みんな始終言い寄って来る。きみはいま首を横に振ってるけど、きみだって見ているだろ。ちくしょう、きみ自身が言い寄って来たじゃないか」(“I’ve never had any trouble getting women. They come on to me all the time. You shake your head now, but you’ve seen it. Christ, you did it yourself.” 288)と対応する。もてる男と言え、*The Girl on the Train*のトムがそうだった。ハンサムな彼も、レイチェル、アナ、メガンという小説の語り手全員と関係している。そしてどうなったか？ レイチェルとアナの完全犯罪で首に穴をあけられて殺されたのである。作者はそれを良しとして、女性読者もその結末に共感した。そして今度も、ポーラ・ホーキンスは、同じことを繰り返すのだ。

トムのときはコルクスクリューだったが、今度は釘だ。ケイティから「どうか、リーナ、わたしのために、この秘密を守ってちょうだい。彼のためじゃないのよ、彼が嫌いなのはわかってる。わたしのために秘密を守って」(Please, Lenie, keep this secret for me. It’s not about him, I know you hate him. Do it for me. 202)と頼まれていたのに結局、警察に秘密の関係を明かしたばかりか、ケイティの入水自殺について教師ヘンダーソンを激しく責めたてて、“I’m sorry, I’m sorry, I’m sorry,” he was saying. “Forgive me. God forgive me.” (311)と本気で謝っているのに、「それって少し遅すぎるんじゃない？」(“Bit late for that,” I said. “Don’t you think?” 311)と容赦しない。3行上には、「手に釘を持って、あたしはテーブルのところまで歩いて行っただけ」(With the nail in my hand, I walked over to the table. 311)とあり、この後どうなったかは読者の想像に委ねられている。

マーク・ヘンダーソンは崖上の別荘の前に赤い車を残したまま忽然と姿を消すが、作者は読者に手がかりを与えている。次のリーナの語りでは、母のプレスレットを取り戻した彼女が、ヘンダーソンに追われることなく崖の道を下りる場面となる。冒頭、「罪悪感が入り込む余地はなかった」(There was no room for guilt. 316)と言い、その後で「あたしに罪悪感が入り込む余地はなかった」(I’d no room for guilt. 317)と言い換える。そして自宅に戻ると、ヘンダーソンがどうなったかについて口を閉ざし、シャワーを浴びながら、「あたしは、彼のすべてがあたしから洗い流されることを望んだ。彼の不潔な家と彼の拳骨と彼の悪臭、彼の息、彼の血」(I wanted him washed off me, his filthy house and his fists and the stink of him, his breath, his blood. 326)と最後が血であることから、釘が使われたことがわかる。リーナはあの世(an afterlife, 326)でマークとケイティが幸せに暮らすことも夢想しており、彼女が殺人を犯したことは明白である。リーナは何も話さないが、ケイティの弟ジョッシュは、本書で省略された場면을噂として次のように語っている。

たくさん噂がある。——学校では、リーナが先生を殺して海に突き落としたんだ、と言ってる。でたらめだと思うけど、たとえ本当でも、ぼくは彼女を非難しないだろう。

There’s been lots of rumours—people at school are saying that she killed him and pushed him into the sea. I think it’s rubbish, but even if it isn’t, I wouldn’t blame her. (367)

これがポーラ・ホーキンスの思いであろう。作者に代わって真相をほのめかし、許しを与えているのだ。“into the sea”は、本書の題名“Into the Water”の言い換え表現と解釈できる。

バックフォードの溺死プールで死ぬのは女性ばかりだった。みな、男性の虐待と横暴に苦しんでいた。愛に殉じたつもりでケイティでさえ、そうだったと作者は言いたいのだ。夫の不倫で妻が愛人を責めるのは間違いで、夫を責めるべきと主張するリーナは、レズビアンを肯定して女性の共闘を願う作者ポーラ・ホーキンスの考えを代弁しているように思われる。否定しようとするジュールズに、リーナはこう言う。

「いいえ、そうでしょ。誰かが浮気したら、なんで、いつでも奥さんが、相手の女性を憎むのよ？ なんで、旦那を憎まないの？ 彼が裏切ったのよ、彼が永遠に愛して大事にするって誓ったんじゃないの。糞いまいましい崖から突き落とされるのは、なんで彼じゃないのよ？」

“Yes, it is. It’s, like, when someone has an affair, why does the wife always hate the other woman? Why doesn’t she hate her husband? *He’s* the one who’s betrayed her, *he’s* the one who swore to love her and keep her and whatever forever and ever. Why isn’t *he* the one who gets shoved off a fucking cliff? (332)

やはり、リーナは、マーク・ヘンダーソンを「崖」から突き落として殺したのだ。この主張は、前作でトムを愛しつつアナを憎んだレイチェルを想起させるが、実際に最後は、元夫を憎んで、愛人だったアナと和解して一緒にトムを殺した。リーナに反論しようとした *Into the Water* の重要人物の一人であるジュールズは、最後の語りで、自分がかつてレイプしたロバート・キャンロンに立ち向かったときの「恐れを知らぬ自分」(the fearless version of myself 378-379)を思い出して、リーナのように強い女になろうと決心する。

以上が、ポーラ・ホーキンスがミステリー・ファンの期待を裏切ってまで書きたかったことである。#MeToo運動について作家のマーガレット・アトウッドは「女性は、悪事を働くことができない天使ではない」(They’re not angels, incapable of wrongdoing.)という女性観を披露し、盛り上がりを見せるこの運動が、女性によるリンチや魔女裁判につながりかねないと懸念を表明した(Atwood)。小説とはいえ、司法制度を無視した女性による男性殺しを肯定するポーラ・ホーキンスは、男性読者

にとっては怖い作家だ。特に *Into the Water* の場合、マーク・ヘンダーソンは校長が高く評価するほどの人気教師だったのに、畏にかけて、「溺死プール」で死んだ女性たちを弔うための生贄のごとく殺してしまった。しかも、殺人犯のリーナに希望に満ちた未来を約束しているのだ。筆者は、ポーラ・ホーキンスという特異な女流作家の私的怨念をひしひしと感じながら、奥深い文学的サスペンス・スリラーとしてこの本を堪能することができた。その意味で、*Into the Water* は、*The Girl on the Train* を凌駕する忘れがたい小説である。

参考文献

- Alter, Alexandra. “Welcoming the Dark Twist in Her Career: Paula Hawkins’s Journey to ‘The Girl on the Train.’” <https://www.nytimes.com/2015/01/31/books/paula-hawkinss-journey-to-the-girl-on-the-train...> (2018年2月5日最終閲覧)
- Atwood, Margaret. “Am I a bad feminist?” *Special to the Globe and Mail*. January 13, 2018.
- Begley, Sarah. “Review: Paula Hawkins’ *Into the Water*.” <http://time.com/4766640/the-girls-off-the-cliff/> (2018年6月15日最終閲覧)
- Book of Secrets. May 25, 2017. <https://www.goodreads.com/book/show/33151805-into-the-water> (2018年2月5日最終閲覧)
- “Book Review: INTO THE WATER by Paula Hawkins — Crime by the Book” <http://crimebythebook.com/blog/2017/4/18/book-review-into-the-water-by-paula-hawkins> (2018年2月5日最終閲覧)
- Corrigan, Maureen. “Does Paula Hawkins’s new novel ‘*Into the Water*’ live up to the hype?” <https://www.washingtonpost.com/entertainment/books/does-paula-hawkinss-new-nov...> (2018年6月15日最終閲覧)
- Flood, Alison. “*Into the Water* by Paula Hawkins review — demanding thrills from *Girl on a Train* author.” <https://www.theguardian.com/books/2017/may/16/paula-hawkins-into-the-water-review> (2018年6月15日最終閲覧)
- Hawkins, Paula. *The Girl on the Train*. New York: Riverhead Books, 2015. (『ガール・オン・ザ・トレイン』上・下巻、池田真紀子・訳、講談社文庫、2015年)
- *Into the Water*. New York: Riverhead Books, 2017. (『魔女の水浴』上・下巻、天馬龍行・超訳、アカデミー出版、2017年)

- Henley, Tara. "Dive into Paula Hawkins' new thriller *Into the Water*." Special to the Star Sun. May 7, 2017.
- King, Stephen. twitter.com/stephenking/status/559683663810797568 (2018年9月7日最終閲覧)
- McDermid, Val. "Into the Water by Paula Hawkins review—how to follow Girl on the Train?" <https://www.theguardian.com/books/2017/apr/26/into-the-water-paula-hawkins-review> (2018年6月15日最終閲覧)
- Milano, Alyssa. twitter.com/alyssa-milano/status/919659438700670976 (2018年6月15日最終閲覧)
- あいあい (2018年1月10日) 「『魔女の水浴』 *Into the Water* (上) カスタマーレビュー」 <https://www.amazon.co.jp...> (2018年6月15日最終閲覧)
- Amazon カスタマー (2016年12月25日)、イッポー (2016年3月31日) 「『ガール・オン・ザ・トレイン』 (上) (講談社文庫) カスタマーレビュー」 <https://www.amazon.co.jp...> (2018年6月15日最終閲覧)

What Paula Hawkins Really Wanted to Write about: From *The Girl on the Train* to *Into the Water*

Koichi YOKOYAMA

Paula Hawkins's sensational world bestseller *A Girl on the Train* (2015) was accepted as a psychological thriller as soon as it appeared. Her eagerly-awaited second novel *Into the Water* (2017), however, seems to have disappointed most of her fans who expected a still more exciting and mysterious thriller than her first one. In fact, one crime novel critic did not conceal his utter disappointment, mentioning it would not be the best choice for crime readers because "the mystery and suspense elements of this story take a backseat." Interestingly enough, he could not help admitting that the novel in question is beautifully written, and he even recommended this book he disliked to those who love literary fiction or women's fiction. After all, he is a good critic, correctly pointing out *Into the Water* is a novel which satisfies academic readers much more than crime fiction lovers.

Despite the fact that many readers undoubtedly regard Ms. Hawkins as a crime writer, it is doubtful that she thinks of herself as one. Reportedly she has no interest in Sherlock Holmes, and her editor of Riverhead usually avoids such genre. Which shows that Paula Hawkins is a serious writer who, I imagine, likes great authors of English and American literature such as Henry James, Virginia Woolf, and even Herman Melville. Her notorious techniques in the new novel, like the frequent changes of more than ten point-of-view characters, appear to derive from the 19th-20th centuries' literary experiments. Perhaps a large number of people who want just an entertainment for a weekend night will be unexpectedly at a loss to find the book they bought so complicated that they can hardly understand what is going on and cannot afford to reason who killed Nel Abbot, although Ms. Hawkins prepares a lot of hints.

If you want to enjoy *Into the Water* to your heart's content, you should read it at least twice. Contrary to your first impression, the novel is quite similar to *A Girl on the Train*: Libby (the same name of the unfortunate baby drowned in the bathtub) is drowned again by a mob of hateful men this time at the opening of the new book. Paula Hawkins's common theme becomes clear due to this repetition. The death of the first Libby was brought by Mac, the irresponsible man who left the young Megan when she most needed him. Tom, another egoistic man, killed Megan when he knew she was pregnant. The heroines Rachel and Anna, though they were ex-enemies, took revenge on him with a corkscrew. *Into the Water* is a double-plot novel consisting of Nel's mysterious death and Katie's pathetic suicide. The former is a real whodunit which reminds me of Agatha Christie's *The Murder of Roger Ackroyd* (1926), but Ms. Hawkins prefers the latter with a strong, feministic message somewhat related to #MeToo trend.

Katie's story is not a mystery at all. She loved secretly Mark Henderson, a good-looking teacher very popular among female students. Since Katie was still a fifteen-year-old girl, Henderson was afraid of being arrested and put into jail where he would probably be the target of manly convicts. Katie drowned herself, trying to prevent their forbidden relation from being known to the public. Lena, her best friend who loved her, exacted revenge on Henderson, stabbing him with a "nail" (a variation of the corkscrew in the first novel) and pushing him off a cliff. This bloody killing is not narrated, the scene intentionally omitted but alluded with enough hints. Seemingly, Paula Hawkins is disappointed in men completely in *Into the Water*, where there is no Kamal. Again she succeeds in letting her heroine kill unpunished another handsome man as the scapegoat for the violent men who have abused women for many years.